さかまた

鴨川シーワールド NO. 31

●その他のできごと

社外講演（講師：鳥羽山館長）

11月7日　昭和62年度旭市教育講演会　テーマ：野生動物とのふれあいをとおして一海の哺乳動物イルカについて一。

11月10日　第2回アクティブちばシンポジウム　テーマ：レクリエーション産業の現状と課題。

1月23日　千葉市立真砂第四小保護者会講演会　テーマ：水族館の動物達一その生活と訓練法一。

2月22日　第2回福島県海洋性レクリエーション懇談会テーマ：海洋性レクリエーションゾーンの開発一鴨川シーワールドの施設建設と運営の歩み一。

2月27日　安房教育会館文化講演会　テーマ：長年の動物とのかかわり合いの中から動物の飼育・調教のポイント一学校教育とのかかわりについて一。

4月19日　鴨川ロータリークラブ例会　テーマ：4頭のシャチと今後の抱負。

研究発表

（日本動物園水族館協会関係）

11月27日　第35回動物園技術者研究会（カリフォルニアアシカの人工哺乳と成長、発表者：毛利主任）。

1月27日　第13回水族館技術者研究会海獣部会（鴨川シーワールドにおける鰭脚類の飼育について、発表者：荒井主任、鴨川シーワールドにおけるイルカ類の飼育について　発表者：金原係員、新施設紹介・シャチ飼育プール　オーシャンスタジアム：君塚課長代理）。

2月17日　関東東北ブロック水族館飼育技術者研修会を当館にて開催（テーマ：水族のプロポーション測定）。

3月3日　第32回水族館技術者研究会（南極産魚類の水質環境、餌料とその成長について、発表者：金鋼課長代理）。

（その他）

11月25日　第10回極域生物シンポジウム（南極産魚類の成長について、発表者：榊原副館長）。

2月16日　東京大学大槌臨海実験所においてイシイルカの研究発表とワークショップ出席（鳥羽山館長、荒井主任、毛利主任）。

その他

3月17日　米国、カナダの水族館視察出張（小坂主任、荒井主任）。

4月2日　海の生きものゼミナール（立教高校46名、テーマ：水族館の役割）

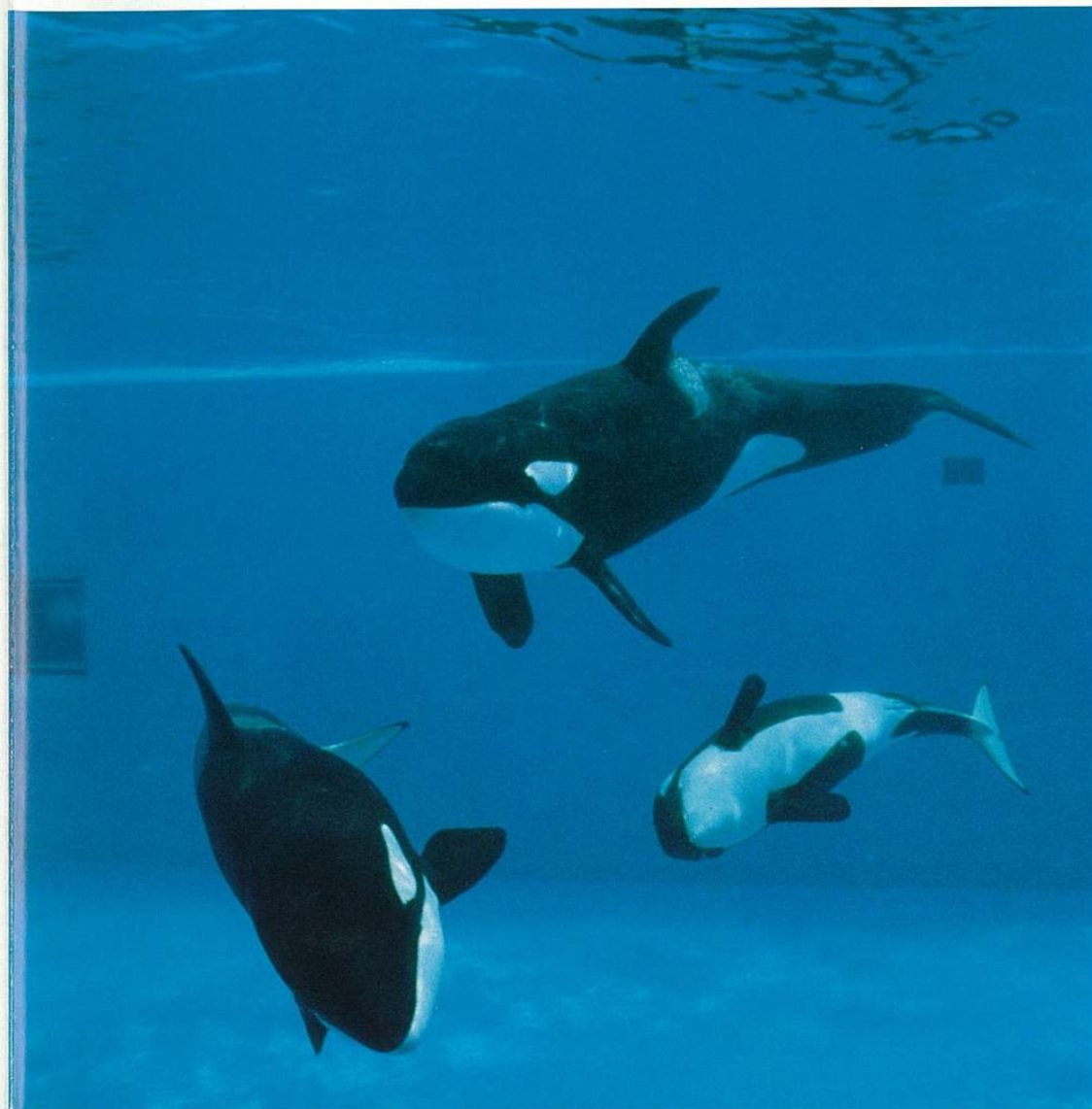
5月29日　ワッペン列車、オルカ号運転。

シーワールドのアニマル達

●アカウミガメ

日本近海で見られるウミガメとしては、アカウミガメ・アオウミガメ・ヒメウミガメ・タイマイ・オサガメの5種類がよく知られています。その中でもアカウミガメは最も北まで回遊し、房総半島でも産卵やふ化した子ガメを見ることができます。鴨川シーワールド前の砂浜には、毎年6～7月頃になると親ガメが海から上って来て産卵し、8～9月頃子ガメがふ化します。

当館では、前の砂浜で生まれた子ガメを、シーズンになると亀プールやパノリウムに展示、お客様にかわいい姿を披露しています。また、最近では、水族館の裏方と仕事を紹介するディスカバリー・ガイダンスの中の「魚とのコミュニケーションタイム」にも登場し、社会教育に一役かっています。魚への給餌が終ると子ガメ達の出番です。お客様にアカウミガメとのふれあいを楽しんでもらうために、手の中に納まってしまうほどの小さなアカウミガメを直接お客様に持ってもらい、陸のカメとは異なり、頭や四肢が甲らの中にひっこまないことや、泳ぐときには前肢を鳥が空中で羽ばたきをするように動かすことなどを紹介し、ウミガメへの理解を深めてもらえるように努めています。数年後には、成長したこの子ガメ達を故郷の太平洋へ放してやることを楽しみに大切に飼育していくつもりです。ちなみにアカウミガメは成長すると甲長90cm、体重 200kgにもなります。（小坂）

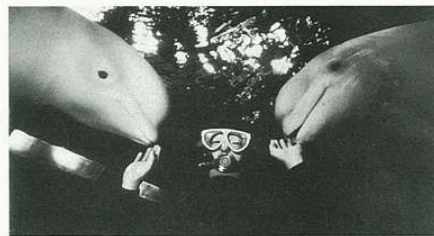
さかまた No.31　（禁無断転載）
編集・発行　鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日　昭和63年7月

ベルーガとイルカの能力紹介

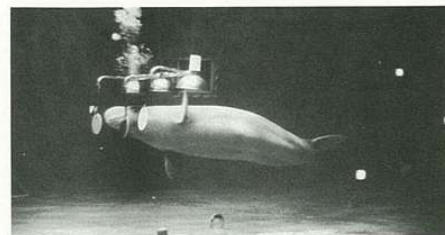
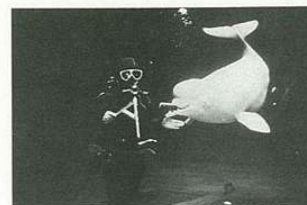
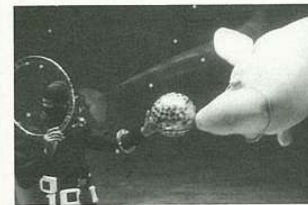
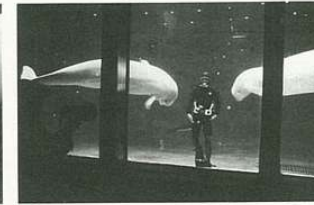
▲水温、気温がコントロールされたマリンシアター

昭和51年8月、カナダのハドソン湾に位置する小さな港町チャーチルで生捕られ、30時間の長旅の末、9月19日、日本に到着した雄1頭、雌2頭のベルーガ（シロイルカ）は、10月1日、日本で初めて当館で公開展示されました。その後、飼育をはじめてから7年目の春には、雄が肺炎で死亡するという惜しい出来事も有りましたが、残った2頭の雌は、彼等のために特別に用意された水温14℃、気温17℃に設定された新しい環境のプールにも順調に馴れ、係員とも信頼関係ができあがり、今年で12年目をむかえています。この間、2頭の雌は、全国の皆様の御協力を得て、それぞれ「チッチ」、「ローラ」という素晴しい名前までつけていただき、また体長も「チッチ」は251cmから326cmに、「ローラ」は、306cmから340cmへと成長し、年齢も「チッチ」15才、「ローラ」17才となりました。

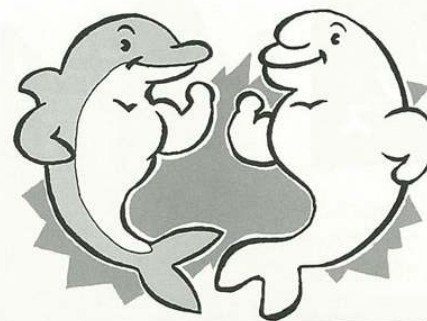
現在では、この2頭のベルーガ達は、健康状態も良好で、マリンシアターで公開されている水中ショーの中で、書物やテレビだけでしか知ることができない「水中生活者としてのイルカの特殊能力」をお客様の目を通して確かめていただけるよう、毎日活躍してくれています。

ここでは、そのベルーガ達の活躍ぶりをご紹介いたしましょう。

色の識別：イルカは、水の中では色をどのように見分けているのだろうか？私達と同じように色を見分けているのではなく、明るさと暗さだけで見分けているともいわれています。そこで、まだ判っていない色の見分け方について、黒、赤、オレンジ、黄、緑、青、白の七色を使って実験を繰り返しおこなってみました。そして、ベルーガには見分けやすい色と、見分けにくい色があることが判りましたので、昭和59年からベルーガの見分けやすい色の赤と白を使い色の識別の公開ショーを始めました。

▲元気な2頭のベルーガ（左：チッチ　右：ローラ）

水中に赤と白に塗られた板を1枚ずつセットし、その板から少し離れたところでダイバーはベルーガに赤か白のいずれかの板を見せます。その板の色を確認したベルーガは、セットされた赤と白の板に向って泳いでいき、いかにも確かめているかのように見える動作をしながら、ダイバーの見せた色と同じ色の板に吻部をタッチします。初めのうちは、とまどっていることもありましたが、すぐにとまどいも消え、ほとんど間違うことなく、赤でも白でも、ダイバーの見せる色を識別するようになりました。いまでは、見分けることができる色も赤、オレンジ、黄、緑、白の5色にまで増えてきましたのでこれからの進歩を楽しみにしています。

▲色の識別・ダイバーの示す色と同じ色にタッチ。

▲形の識別・眼隠しをされたベルーガがダイバーの示す形（A）と同じ形を選ぶ

▲大中小の識別・ダイバーが持つ大きな輪により大きなボールを運ぶ。

▲コミュニケーション・光の合図を右側のローラが眼隠しをした左側のチッチに伝達、動作（逆立ちスピン）をおこなう。

形の識別：イルカは、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の五感の内、味覚、嗅覚の神経は欠如し、視覚、聴覚、触覚の三感を使って生活しています。特に聴覚は良く発達し、暗い夜の海でも障害物にぶつからずに巧みに泳ぐことができ、その上、障害物の形や質までイルカ自身の出す音の反射によって知ることさえできるといわれています。

そこで、ベルーガに眼隠しをして、いろいろな形の中からダイバーの持っている形を選んでもらう実験をしてみました。最初は○、△、□の3種類の形から始めましたが、簡単そうに見えるこの実験も、急に眼隠しをされたベルーガにとっては不安感が強いとみえて、本来の能力を出してくれるまでには、しばらく時間がかかりました。しかし、眼隠しにも馴れてくると、ダイバーの持つ形を○、△、□、の中から正確に選んでくれるようになりました。現在では、○、△、□の他にA、B、C、ダイヤ、平行四辺形、二等辺三角形、直角三角形など間違えやすい形も容易に判別して選んでくれるまでになっています。

イルカの会話：イルカ同士は、音を使って仲間同士会話をしていることが知られています。しかし、実際にその会話をしている様子を目で確かめた人々は少ないと思います。ベルーガ達は、今年からこの会話の実際を皆様にお見せしています。2頭のベルーガに光サインを送り、逆立ちをしてクルクルと体をまわす訓練をした後、1頭に眼隠しをして、同じように光サインを出すと、眼隠しをされたベルーガが、眼隠しをしていないベルーガと同じように体を回転させるのです。眼隠しをしないベルーガから眼隠しベルーガに光サインの出たことを教えているのです。ベルーガ達は、会話をしていることが、この実験で判っていただけるものと思います。

この他に、人間の言葉の記憶や、眼隠しをしての障害物くぐり、木と金属との識別などの実験もショーとして公開しています。ベルーガ達は、このように今まで目で確かめられなかったイルカの能力を、いろいろな方法を使って教えてくれています。しかし、ショーとして見ていただいているとはいえ、1回1回が実験の繰り返しと同じですから、これからもこれらの実験を続けることにより、判っていなかった事柄が明らかにされるかもしれないと期待しています。　（前田）

トピックス

シャチ4頭搬入

桜の季節にはあまりに寒い、誰しもがそう感じた3月29日、はるか遠く、そしてはるかに寒いアイスランドから28時間かけて雌2頭（体長 290cm、体重460kg、体長408cm、体重1050kg）と雄2頭（体長336cm、体重624kg、体長394cm、体重920kg）のシャチが鴨川シーワールドへやってきました。

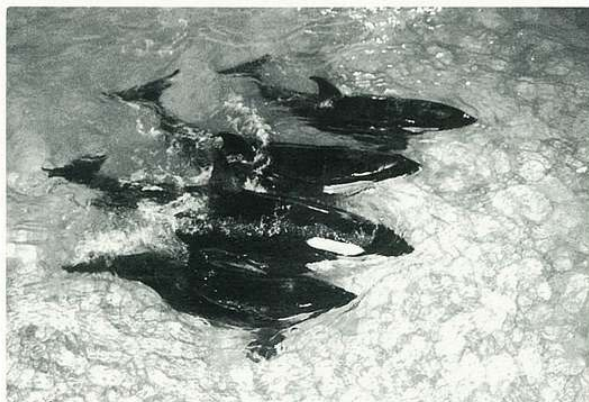
すっかり日も暮れた午後6時半過ぎ、

3月29日11時55分、アイスランドからのチャーター機で無事成田空港に到着。

シャチを収容するオーシャンスタジアムは、数多くのライトで照らし出され、作業が開始されました。一度に4頭のシャチが搬入されることは、今までにも例のないことです。多くの報道関係者や当館従業員が見守る中、シャチは1頭ずつクレーンで吊り上げられ、プールへ移されていきました。そして、最後の1頭が係員の手を離れ自力で泳ぎ始めると、一斉に大きな拍手が起りました。作業終了後もプールサイドには、4頭のシャチの泳ぐ姿をながめる多くの人影が、遅くまで見られました。

今回4頭のシャチが搬入されたことにより、鴨川シーワールドのシャチは、現在スターとして活躍している雄のシャチ「ビンゴ」を含めて5頭となり、世界で最も多くのシャチを飼育している水族館となりました。ニューフェースのシャチ達の今後をご期待下さい。

（勝俣）

1頭ずつ、ていねいにオーシャンスタジアムのサブプールへ搬入されるシャチ。

プールへ収容完了!!長旅のつかれもみせず、元気に泳ぐシャチ。

本邦初公開!!

タテゴトアザラシ

食事風景。すっかり係員にも馴れました。

世界には19種類のアザラシが生息していますが、このうち日本では、これまでに9種類のアザラシについて飼育がおこなわれてきました。ところが、このたび4月15日に10種類めにあたるアザラシが鴨川シーワールドにやって来ました。その名はタテゴトアザラシ、英名でハープシールといい、成獣の背中には楽器のハープに似た模様があり、特に雄では灰白色の地に黒色の「竪琴」が明瞭となる、北極海周辺にすんでいる種類です。しかし、今回搬入された個体は、今年生まれと若令であるためハープ模様は体表上にあらわれていません。

この貴重なアザラシの到着に、ただ喜んではばかりはいられず、まずは飼育室内の気温を20℃、水温を17℃に冷し、「餌付け」の始まりです。ところがこのアザラシ達、人に馴れていず、なかなか餌を食べてはくれません。それどころか、人が近づくとプールにあわてて逃げこみ、顔も見せないという始末です。しかし、日がたつにつれ係員の努力も実り、次第に馴れてきて今では人が近づくと、「ウィーン、ウィーン」と餌を求める大合唱、ヒザの上にまで乗ってくる甘えん坊さえでてきました。未知の動物のため、これまで以上に神経を使わなければいけませんが、ハープ模様が出てくる時を楽しみに大事に飼育していきたいと思います。　（荒井）

今年の春生まれ、まだあどけない顔をしています。

本邦初公開!!どうぞよろしく

世界で飼育されたアザラシ類

① ハイイロアザラシ
② **ゼニガタアザラシ**
③ **ゴマフアザラシ**
④ **ワモンアザラシ**
5 カスピカイアザラシ
⑥ バイカルアザラシ
⑦ **タテゴトアザラシ**
⑧ **クラカケアザラシ**
9 ズキンアザラシ
⑩ **アゴヒゲアザラシ**
11 チチュカイモンクアザラシ
12 カリブカイモンクアザラシ
13 ハワイモンクアザラシ
14 ウェッデルアザラシ
15 ロスアザラシ
16 カニクイアザラシ
17 ヒョウアザラシ
⑱ ミナミゾウアザラシ
⑲ **キタゾウアザラシ**

○印は日本で飼育歴のあるアザラシ（10種類）
太字は鴨川で飼育歴のあるアザラシ（7種類）

"マンボウ飼育のウラ話"
●マンボウ「クーキー」のあとつぎたち

クーキーは、4月11日現在飼育日数が2300日を突破し、飼育世界記録を大幅に更新中ですが、当館にはクーキー以外に別の水そうで2尾のマンボウが飼育されています。彼等は、昨年の12月と今年の4月に鴨川沖の定置網で採集され、体長は70cmと80cmでまだ小さな個体です。彼等を、クーキーと一緒に飼育してみようと何回か試みられましたが、お互いぶつかったり、神経質になってエサを食べなくなったりして共存展示は失敗し、あらためてマンボウ飼育の難しさを実感させられています。いつでもマンボウが見られる水族館としての、縁の下の力持ち的な大きな役割をはたしている彼等を今後も大切に飼育していきたいと思います。

（津崎）

●仔イルカの愛称決定

昨年6月8日に生まれたバンドウイルカの子どもの愛称が、このほど「クリス」と決定しました。今回の愛称募集には、全国各地から4,996通もの応募をいただきましたが、愛称としては、雌ということもあり、人気アニメやドラマの女主人公の可愛らしい名前が多く見られました。選考委員会は4月19日に開かれ、多くの愛称の中から母イルカ「スージー」の一文字が入り、愛らしく、女の子らしい名前という理由から、東京都足立区の伊藤みのり様（10才）の「クリス」を採用させていただきました。伊藤様には、イルカの特大ぬいぐるみや写真集等が贈られた他、全応募者より厳正な抽選により50名様に、写真集や入園招待券が贈られました。

（村田）

●特別展示「シャチの世界展」

春催事の一つとして、3月20日から5月5日まで「キング・オブ・ザ・シー　不思議がいっぱい！シャチの世界展」が開催されました。

会場の「ピノキオハウス」には、シャチやマッコウクジラなどの骨格標本をはじめ、模型、パネルなどを展示し、更には、エコーロケーションや、シャチとの能力比べなどの体験コーナーも設けました。シャチを中心に鯨類の生態や能力、人との関わりなどを判りやすく紹介すると共に、各地から集めた鯨類の民芸品や装飾品、書籍などの展示販売も行ない、大勢のお客様から好評をいただきました。なお、開催に当り多大なご協力とご支援をいただいた国立科学博物館、ならびに日本鯨類研究所の関係者一同に本紙面を借り心から御礼申し上げます。（村田）

●ショーステージの改装

毎年、春休みのシーズンから新しくなるショー内容に合せて、各動物ショーのステージ改装をおこなっていますが、今年度は、昨年12月にはやばやとイルカショーステージの改装工事が行なわれました。

イルカショーステージは、ギリシャ時代の神殿風建物のイメージで全体をまとめられ、左右の白い壁には、ワンポイントデザインとして古代ギリシャ時代の有名な伝説に出てくる「イルカに乗った少年」のレリーフが取りつけられています。イルカスタンドの前に立つと、イルカと人間とのかかわりあいについてかずかずの伝説を残した古代ギリシャ時代に、再び足を踏み入れた雰囲気を味わっていただけるものと思います。（佐伯）